

コラム・先輩から④ 「学校全体で考えよう」

「組織として支援する」ことにより、児童生徒の成長につなげる環境が整います。一人で悩んだりせずに周りに相談しながら、積極的に学校に働き掛け、主体的に支援の環境を改善していくことが必要です。このことは、担任のあなたが、困った問題を抱え込まないためにも、児童生徒の生活リズムを良くする上でも、大切なことです。

私は、支援体制を得るために児童生徒と共に担任が周囲の人たちとコミュニケーションをとり、関わる機会を増やすようにしていました。コミュニケーションをとる場面を次の五つに設定しました。

1 交流学級（協力学級）でのコミュニケーションづくり

交流学級の学級担任とつながりながら、児童生徒の実態に合わせた交流計画を作成します。児童生徒ができること・できないことを洗い出し、年間を見通して取り組めることを交流します。インクルーシブ教育の観点からも、「交流内容」を押さえて活動することは、今後、ますます重要になると思います。

2 特別支援学級等でのコミュニケーションづくり

朝の会や朝の活動、共同学習等で連携することがよく行われます。特別支援学級全体で動く場合、適宜、それぞれの担任がどのような支援に当たるか、打合せを繰り返していくことで、児童生徒の支援もより良いものになっていきます。

3 学年学級担任以外の職員でのコミュニケーションづくり

朝のあいさつ等で職員室に出向き、いろいろな人と「おはようございます。」のあいさつをして、1日をスタートさせていくのが良いと思います。何か特別支援学級で行事を行った時、ご招待をすることも関係性を深めるのに有効です。

4 個別学習及び対応でのコミュニケーションづくり

学級内に複数の児童生徒がいて、マンツーマン体制で取り組むことが必要であると判断された場合、他の先生方の応援が必要になります。特に、校外学習等では、安全面に配慮し、支援内容に応じてフレキシブルな支援が求められるところです。何か活動しようとした時、『この時は、誰が支援に入るか』等、細かな支援体制を組むことが大切です。

5 具体的な支援場面を想定したコミュニケーションづくり

前述の校外学習の対応等がこれにあたりますが、学校生活におけるあらゆる場面できめ細やかな支援が必要になります。（具体例：発表会及びパーティー等の企画、教室の開放、学級通信の活用、校内で活躍する場面の設定等）学校実態や児童生徒の実態に照らし合わせて考えてみましょう。

このようにベースとなる支援体制が整ったら、さらに児童生徒にとっての具体的な支援の方法を考え、工夫してみるといいでしょう。児童生徒の変容につながる支援の視点としては、次のようなことがあげられます。

- ・教材、教具
- ・学習集団の構成
- ・働き掛け、言葉掛け、示範等
- ・指導体制
- ・学習環境
- ・見通しの持たせ方
- ・成果、伸び、変容の見える化
- ・周囲の児童生徒とのつながり、所属感の高まり

こうした視点を持って支援を積み重ねることで、組織的な協力関係が培われ、校内支援体制がより一層充実していくと思われます。